

第5章 現在の和歌山と将来



くらしの中の伝統産業

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

私たちの身近なところで伝統産業が営まれ、くらしを便利で快適なものにしています。

綿ネル業

綿ネル^{たんじょう}誕生のきっかけは、1869(明治2)年の和歌山藩^{はん}の兵制改革です。工夫を重ね伝統^{もん}の紋羽織^{ぼおり}から「洋品フランネル」をまねた「紀州ネル」をつくり軍服としました。これは各地の軍隊にも採用され、紀州ネルは綿ネルの代表となり主要産地となりました。さらにその生産を通して、スフ・メリヤス・ニット(ジャージ)、紡績^{ぼうせき}・織物^{ぼうせい}・縫製^{なつせん}、捺染^{せんしよく}、染色化学、捺染機械^{あみき}・編機^{せんい}の製造などの繊維関連産業が、和歌山市を中心に県内各地に生まれ発展し、現在も繊維工業は和歌山県を代表する産業のひとつとなっています。

パイル(シール)織物

パイル織物とは、織物の表に短い糸を織り出した織物で、そのうちアザラシの皮のようになめらかなものをシール織物といい、橋本市高野口町など伊都地方で多く生産され、全国シェアの80%以上を占めたこともあります。「川上木綿^{かわかみ もめん}」の産地でしたから、綿ネルを経て、再織^{さいおり}をつくり出しました。再織は芸術的な要素があるものの量産できず、大正時代にパイル(シール)織物が機械化され産地に発展しました。



パイルの織機(橋本市高野口町)

高度経済成長期には技術革新が進み、素材も木綿に加えてアクリルなどの合成繊維^{せんい}を用い、衣料・毛布・モケット(電車の座席用^{ざせき})・カーテン・ぬいぐるみ用生地などのほか、1975(昭和50)年以降は自動車のシート生地が過半を占めました。モケットは今も新幹線^{しんかんせん}や観光バスの座席用生地として使われています。近年、安価な輸入品もあり厳しい状況ですが、再織製織技術の近代化に取り組み、コンピュータで作動するモダンなテクノテキスタイルモール(再織=彩織)が誕生し、新たな展開がすすめられようとしています。

皮革業

和歌山市の皮革業^{ひかく}は武具として利用された江戸時代初めにさかのぼりますが、明治初期の和歌山藩の兵制改革が転機となりました。革細工師^{かわざいくし}をドイツから招き革製作伝習所を開き、製革^{せいかく}・製靴工業^{せい か}の基礎がつくられました。廃藩後は個人が経営するようになりますが、1873年に名古屋と広島^{なごや}の陸軍^{ぐんじゆひん}の軍需品を引き受けるなど産地となっていきました。第二次世界大戦後は民需品生産に切り替え、1972年ごろから、近代化、合理化を図り品質も世界水準に達する一次製品(中間品^{きょうきゆう})の供給地となりましたが、合成皮革とバッグなどの輸入製品の増加などにより生産量は減少しています。

* 1 いっぱん織りあげた布を切断し、撚りかけてモール状の糸として再び編って製品にする。

家庭用品

キッチン・バス・トイレなどで使われる家庭用品が海南市と紀美野町で多く生産されています。商品の種類は3,000以上もあり出荷額は約516億円(2004年度)といわれ、全国生産の約80%以上を占めて日本一となっています。

家庭用品の原料はシュロでした。水に強いので重宝され、明治時代には農漁業用・軍需用などの縄・綱・網などが生産され、大正時代には製縄機などの改良があり、業者が販路を大きく広げました。その後、原料にパーム（ヤシ）の実の繊維やマニラ麻などを輸入し、ほうき・たわし・ブラシ・マットなどが広く生産されていきました。

高度経済成長期には、ビニロン・プラスチック・発泡ウレタンなどの化学素材に変わり、機械化により大量生産がすすみました。スーパーマーケットなどができ、流通・販売面での変化もありました。さらに、住宅の洋風化により新しい商品が開発され、また自動車用品も生産されるようになりました。

近年は中国など海外に生産拠点を移すメーカーも増え、安価な外国産商品の輸入増により国際的な競争時代に入りましたが、地球環境や高齢化社会を考え、自然に還る素材など環境と人にやさしい製品の開発に努めています。



家庭用品（海南市）

紀州漆器

海南市黒江で中心に生産されている紀州漆器（黒江漆器）のうち伝統的な盆・椀などの木製漆器は国の「伝統工芸品」に指定されていますが、高度経済成長期から、素材はプラスチックなどに、塗料は漆・カシューなどから化学塗料に、技法も塗りから吹付けが主となりました。鏡類・状差し・花びん・花びん台・雛人形などの室内装飾品が増え、最近ではリモコンラックなどが生産され



紀州漆器（海南市）

ています。国内四大生産地の一つに数えられていますが、厳しい状況にあります。西洋机に漆風の塗りをほどこした試作品や、漆器まつりにも衝立・大雛人形や漆風の塗りをほどこした郵便ポスト・自動車・原付自転車などを製作し展示するなどして、各種の製品をつくる新しい取り組みが続けられています。

醤油

醤油は肉料理をはじめ各国の料理に使用されるなど、その風味は世界に広まりつつありますが、大手の業者が業界を圧倒しています。しかし、県内には湯浅を中心に約20の醸造元があり、それぞれが独自の製造方法で天然醸造の伝統を守り、「手造り醤油」として全国的に静かなブームを呼んでいます。

これらの伝統産業も流行や景気の波があり、近年は国際競争も激しく、経営は厳しくなっています。しかし産地では国内や海外の消費者の気持ちをよくつかみ、今まで身につけた技術を生かして、デザインやファッション性に優れた新商品の開発に懸命の努力をしています。また、環境にやさしい製品の開発もすすめられています。

* 1 ウルシ科の常緑喬木で、樹脂を塗料やゴムなどに使う。化学塗料の名前にも使われている。